2024年12月の総評に代えて　　高橋修宏

累計の中の数字として消える
死者数の分の好きだった花　　**桜望子（山形県）**

戦争などはもちろん、日々の報道の中で「死者」は「数字」という抽象的なデータになってしまう。そんな「死者」たちが「好きだった花」もまた、データになってしまうことに対して、作者は「花」の一語を作品の最後に置くことで争おうとしているのかもしれない。

冬の虹化石は水を懐かしむ　　**長谷川柊香（宮城県）**

この「化石」が、植物であれ動物であれ、かつて生命を育んでいた存在であるならば、「水」は欠かせないもの。悠久に変わることのない「冬の虹」が、そんな「水」の記憶を呼びおこすようだ。

せっけんの泡
ほむほむ
と生みだして
神話のようなきみの手のひら　　**さいう（石川県）**

やはり、四行目「神話のような」という直喩が新鮮。手を洗うという日常的な身振りが、そのまま、かすかな聖性を帯びるような瞬間を切り取っている。

小春日をちよこれいとの大股で　　**杢いう子（佐賀県）**

じゃんけん遊びの「ちよこれいと」――。子どもに戻ったような他愛もない遊びの気配が、「小春日」の長閑さと響き合うような一句。

おとなになるとみんなはなぜか
身体が大きくなって
だれかとぶつかる　　六月（埼玉県）

一、二行目は当たり前の事象に見えながら、三行目で驚かされる。「だれかとぶつかる」が物理的なことに見えながら、「おとな」になると引き受けざるをえない社会的、さらには精神的な確執まで含んでいるのではなかろうか。

脱皮した服を袋に詰め込んで
街に置き去りにする人々　　貴田　雄介（熊本県）

リユースやリサイクルが一見、盛んになるにも拘らず、服／ファッションが環境負荷の上位にランクされている。そのことを、あるドキュメンタリー映像で知った。そんな状況に対する批評性を、「脱皮」という比喩によって表現したかのような作品。

鏡割る強さで首を振り下ろす
キリンは風に溺れたいのか　　常田　瑛子（山口県）

たしかに「キリン」が水を飲んだりするときに、その長い首を「振り下ろす」シーンを目にすることがある。その奇矯にも見える動作のインパクトは、われわれに謎めいた不思議な印象を残す。

QR コードに迷い込んだ犬　　さほ（神奈川県）

なるほど、「QR コード」は迷路のようだ。作者は、「犬」という具体的な存在を記すことで、はじめて「QR コード」に出会ったときの印象を召喚する。「QR コード」に頼るわれわれもまた、「迷い込んだ犬」なのかもしれない。

セロテープみたいな
僕じゃ駄目ですか　　**深谷　健（埼玉県）**

　かつて、〈無くしてわかる有難さ。親と健康とセロテープ〉（仲畑貴志）というウィットの効いた広告コピーがあった。「セロテープみたいな」という一行にも、そんな機知とユーモアが込められているのではなかろうか。

うつぶせたままに鏡を運ぶとき
シーラカンスの肺のくらがり　　**石村　まい（兵庫県）**

　一行目から二行目への修辞の飛躍が大胆で驚かされた。見たことがないにも拘らず、「シーラカンスの肺のくらがり」という比喩が、うつぶせにされた鏡のイメージを現前させるようだ。

体操のふしぎなかたち山落葉　　**空音アオ（大阪府）**

　村野四郎に初期のモダニズムを代表する『体操詩集』があるけれども、やはり日常的な身振りとは異なる「体操」のフォルムは、「ふしぎなかたち」なのだろう。どことなく、「山落葉」とも響きあう気配。

しらじらと泥土に眠る葱の純潔　　**鶯浦　るか（富山県）**

　やはり、最後に置かれた「純潔」の一語が印象的。冬の間、泥の中で眠ってきた葱の白い茎、そのイノセントな清浄さを鮮やかに捉えた一句。